

# 「鬼滅の刃」に学ぶ、 レジリエンスの極意

※本コラムは、「鬼滅の刃」原作の内容を含みます。漫画を未読の方、アニメや映画をまだご覧になっていない方は、ご注意ください。



大東文化大学社会学部社会学科助教  
心理・キャリアカウンセラー  
井島 由佳

映画「劇場版 鬼滅の刃 無限列車編」の勢いは止まらず、歴代興行収入

2位に上り詰めている(2020年12月1日現在)。まさに「鬼滅の刃」旋風を巻き起こし、連日、ネットやテレビのニュースに取り上げられるほど、社会現象化している。

爆発ヒットのきっかけは、テレビアニメ化だと考えられている。ファンの中には、「コミックは読んだことがないがアニメは観た」や「アニメを観てマンガが読みたくなった」という意見も多く出ている。

週刊誌連載から3年後の2019年4〜9月の半年間で、TOKYO MXほか全20局で放映されていたが、戦闘シーンといえど非常に過激で壮絶な戦いは、血と頸が飛び、時に子どもが惨殺されるシーンがあったことから、放映当初は深夜番組であった。いわゆる「全国放送」ではなかったアニメが、なぜ空前のヒットを遂げたのであろうか。

それに大きく貢献しているのは、

ウェブを通じた20を超える配信プラットフォーム戦略とバンドワゴン効果(皆が良いと言っているから好感を持つ)であるが、もうひとつは「設定とキャラクターの強い生き様」がハイスピードで展開される内容の濃さでもある。

## 打たれても立ち上がる 炭治郎の姿＝レジリエンス

なかでも、主人公の竈門炭治郎(かまどたんじろう)の慈悲深く努力家である姿は、ときに励まされときに応援し、思春期の子どもたちや親世代にとっては眩しい存在である。心理学的には「自己効力感」が非常に高い存在といえる。自分の歩んできた道で得た力を信じ、師匠を信じ、目標に向かってひたすら前に進む姿は、打たれても打たれても立ち上がる再起力の高さを表わしている。これは、レジリエンスである。自己効力感(レジリエンス)を構成す

る要素のひとつである。

拙著『鬼滅の刃』流「強い自分のつくり方」では、レジリエンスという言葉葉は用いていない。それは、読者層が10代からに設定されていたからである。その代わりに用いた言葉が「強い自分」であった。強い自分は、折れずに立ち上がるタフさを示しており、困難に立ち向かいながらも成長していく意味を込めている。

レジリエンスとは、Masten, Best & Garmezy(1990)によると「自己が日常生活における困難な状況に遭遇しても適応できる強さや力をもつ」という信念や、困難な状況への適応のプロセスや結果」と示している。この言葉を考えても、いわゆる「しなやかに逞しく強い生き様」であることがわかり、炭治郎の姿が浮かぶ。鬼に家族を惨殺され、妹の禰豆子(ねずこ)を鬼にされ、絶望の淵に立っても、妹を人間に戻すため、炭売り少年が刀を持

つに至った。しかも、多くの登場人物

が鬼の禰豆子を連れていることを嫌悪する中で、炭治郎の物怖じしない素直でひたむきな姿に感化され、変わっていく。レジリエンスを構成する要素に「働きかけ力」がある。失敗を恐れずに自分から物事や他者にかかわっていく力のことである。炭治郎は本当にレジリエンスが高い。

## レジリエンスの高さの 見本となる登場人物たち

レジリエンスの高さを表しているのは炭治郎だけではない。一見、ただの暴れん坊に見える同期の嘴平伊之助(はしびらいののすけ)も、鬼殺隊(鬼狩り集団)をとりまとめる「お館様」である産屋敷輝哉(うぶやしきか)も、鬼殺隊の頂点に立つ「柱」たちもそうである。強靱な精神は最初から備わっていたわけではなく、辛く悲しい経験を通して使命を抱き再起していく。冒頭に示した「劇場版 鬼滅の刃 無限列車編」で多くの人の心を震わせ

るのは、「炎柱」である煉獄杏寿郎だ。

年齢にして己の使命を自覚し、後進を育てる気概を持ち、己の正義に散っていく姿は、善い人が早世していく寂しさと悲しみをもたらす。炎柱だった父が突然に鬼殺隊を辞めてしまい、杏寿郎が「柱」をめざすことを喜ばなくなった理由を、杏寿郎は知るよしもなかった。それでも幼い頃に病気で倒れた母が示した「使命」を心に刻み、どんなときも心を燃やして前に進む青年となった。プレッシャーのもとで落ち着きを保ち、未来に希望を持ち、自分と周囲を信じる力はレジリエンスの高さを示している。

姉の願いである「鬼を理解する」とを炭治郎に託し、姉を殺した鬼の童磨との戦いで自らの命をなげうった「蟲柱」の胡蝶しのぶもレジリエンスが高い。腕力が無ければ他の手を考え、毒の開發を行うことで戦う術を得た。他者への共感力が高く状況を分析し、目標に向かう姿もまたレジリエンスを示している。

鬼となった母から弟を守るために母を殺めた「風柱」の不死川実弥も、一番守りたい弟・玄弥に嫌われることを覚悟し、逆境に立ち向かい困難に適応していく姿はレジリエンスを表している。

姉と仲間を鬼に殺されながらも、

炭治郎と彌豆子の関係に希望を見出した「水柱」の富岡義勇も、面倒を見ていた子どもにも裏切られたと思いい、さらに冤罪をかけられた「岩柱」の悲鳴嶼行冥も、鬼の所業で一族を保っていた「蛇柱」の伊黒小芭内も、10歳で両親を亡くし、その後鬼に双子の兄を殺され記憶障害を負った「霞柱」の時透無一郎も、忍一族の理不尽な状況から足抜けしてきた「音柱」の宇髄天元も、女性の規定から外れているとみなされ居場所をなくした「恋柱」の甘露寺蜜璃も、その過酷な生い立ちから、鬼殺隊となることによって再起し「柱」まで上り詰める姿は、レジリエンスの高さの見本である。

もちろん、何人かの鬼となった者たちへの共感の声も聞こえるが、これは反面教師であり、レジリエンスが得られなかった姿なのである。鬼殺隊も鬼も、それぞれの困難な状況に身を置いていたことには変わりはない。しかし、苦しみに苛まれたとき、自分を守ることにだけに心が向き、人を傷つけることに躊躇しなかったときに、鬼に傾く。これはリアルな世界でもいえることで、人間の心が鬼を作り出していることを示唆しているのである。

## 共感力と自己効力感がレジリエンスを高める

では、炭治郎や柱たちはどうしてレジリエンスを高めていったのであるのか。「性格」というのは元も子もないが、あながち間違っていない。素直に真面目に使命感を得て、自分の力と他者を信じる心は、物事を認識する物の見方（認知）が影響しているからだ。

そして、他者のために行動ができるか否かである。レジリエンスを構成する要素の1つに「共感力」がある。言葉や態度、雰囲気から他者の心理的・感情的状態を示す手がかりをうまく読み取ることができるといえる。他者の状況をくみ取ることができるといことは、他者のために行動できることの大前提である。自分の都合や気持ちを中心となっていては、なかなかくみ取ることができない。

炭治郎や柱たちは、根底に共感力と自分の得てきた能力を信じる自己効力感があるからこそ、レジリエンスを高めていったのだと考えられる。

拙著では、炭治郎が困難に直面しても、なぜあきらめずにいられるのかについて、覚悟を持つ・誰かのために・自分を信じる・使命感を持つ・他者の

声に耳を傾けることがあきらめない力となっていることを示している。これは、言い換えればレジリエンスを高めるための要素を培うことを示唆している。

レジリエンスが高い人を見ると人は好感を持ち心の底で憧れる。「鬼滅の刃」には、レジリエンスを高める方法やレジリエンスが高い姿が随所に描かれているから読み手や視聴者にとってポジティブで好意的な印象をもたらすのである。そして、少年マンガでありながら「死」を扱い、登場人物の過酷な過去を背景に、使命感に燃え困難に立ち向かう生き様が随所に表現されている。それゆえに、人々に感動を与え心に残ると考えられる。

### 鬼滅の刃

呼吸と技と刀で鬼と対峙する戦闘シーンが印象的な吾峠呼世晴氏の大正剣戟マンガ。『週刊少年ジャンプ』に4年3カ月（2016年2月15日～2020年5月18日）の間連載。

### いじま・ゆか

大東文化大学社会学部社会学科助教。心理・キャリアカウンセラー。1970年東京生まれ。東京家政大学大学院家政学研究科人間生活学専攻修了。博士（学術）。専門は教育心理学、キャリア心理学、マンガ心理学。ライフキャリアとマンガに関する研究を行う。キャリアデザイン、チームビルディング、メンタルヘルスなどの専門家。自治体や企業等で研修講師を務める。最新著に『「鬼滅の刃」流しい自分のつくり方』（アスコム）